公益社団法人
日本語教育学会
－世界の日本語教育―

（インド／デリー）
2023 年 3 月

初中等の学習者を対象としたヒンディー語に基づいた連想法ひらがな絵カード作成
－インドにおける現地調査報告－

羽持 悠希（一橋大学大学院生）
目黒 裕将（エイム奈良国際アカデミー）
井元 麻美（京都外国語大学大学院生）

１．はじめに

日本語教育においてひらがなやカタカナを導入する際の方法の一つに学習者の母語に基づいた連想法がある。これは、該当する仮名の音に近い発音を含む学習者の母語の語を用いることによって、仮名の定着を図るものである。また、その語を表す絵を用い、絵の中に仮名を入れた絵カードも連想法で用いられることもある。本プログラムでは、北インドの初中等の学習者を対象としたヒンディー語に基づいた連想法ひらがな絵カード作成を目的とした活動である。

２．インドの初中等教育機関での日本語教育

インドの初中等教育機関における日本語教育は 2006 年に正式に開始した。初中等教育機関は学校の方針に合わせて、「Board」と呼ばれるシラバス策定・修了試験実施団体の中から 1 つを選び、団体が作成したカリキュラムを採用している。特に、本プログラムが対象としているヒンディー語母語話者の多いデリーおよびデリー近郊では、中等教育修了試験実施団体の一つである「Central Board of Secondary Education（以下、CBSE）」を採用している学校が多い。この CBSE では、日本語を大学入学試験の科目として採用しているため、日本語科目を開講する学校も増加した。インドの教育制度は、初等学校（primary school）1-5 年生、上級初等学校（upper primary school）6-8 年生、中等学校（junior secondary school）9-10 年生、上級中等学校（senior secondary school）11-12 年生となっている。そして、主に 6 年生から日本語を学び始めるが、早い学校では 1 年生から日本語を学んでいる。

『海外の日本語教育の現状 2018 年度日本語教育機関調査より』（国際交流基金 2020b）によると、学習者数は初等教育機関においては 7,983 名、中等教育機関においては 5,526 名となっている。

学校の環境は様々だが、多くの学校では、1 校に 1-2 名のインド人日本語教師が常勤講師や非常勤講師として学内で行われる日本語授業を全て教えている。そして、デリーおよびデリー近郊のインド人日本語教師が中心となって「Japanese Language Teachers' Association of India（以下、JALSTA）」が発足され、ワークショップはもちろん、学習者のためのコンテストを実施するなど活発に活動している。本プログラムはこの JALSTA と協力しながら行っている。

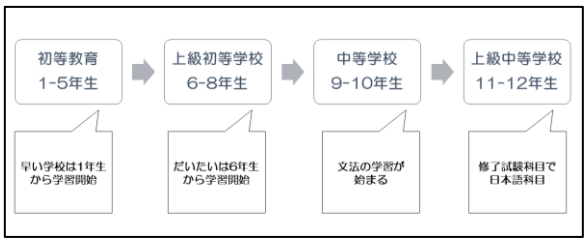

図 1 インドの教育制度（国際交流基金 2020a）をもとに作成

３．本プログラムの動機・目的

研究調査者 2 名（井元・羽持）が北インドの初中等教育機関で日本語教育に携わり、そこでひらがなを定着させることが非常に困難であると感じ、ひらがなの導入に効果的な教材を作成しようと思ったのが、本プログラムを始めた動機である。

2.で述べたとおり、6 年生から日本語を学び始める学校が多いが、ひらがなを定着させるのに時間がかかっている。そこで、インド人日本語教師は教材を自作したり、インターネット等を用いて、定着を図ろうとしていたが、それほど効果をあげることができていない。学習者向けのイベントにおいてひらがなカルタなどのゲームをするが、こうした活動が効果的であるとは言い難い。また、ヒンディー語に基づいたひらがな連想法絵カードがすでにあるものの、ヒンディー語だけでなく英語からの語がある、絵と字のバランスが悪いので教室内で用いる教材として使いにくい、ひらがなが曲がっているなどの問題点があった。また、この絵カードが作成された経緯も不明であり、教材の有効性も明らかになっていない。

インドの日本語教育に関する先行研究は限られている上に、初中等教育機関に関するものは、管見の限り非常に少ない。そこで、本プログラムでは、北インドの初中等教育機関において、インド人日本語教師がどのようにひらがなの導入と指導を行っているかという点を明らかにする。そして、日本語を学び始めることが多い 6 年生を対象としたヒンディー語に基づいた連想法絵カードを作成し、JALSTA とともに、教材の有効性を検証し、さらに教材完成後は教材を

広く普及するためのワークショップ等も行うことが目的である。

４．ひらがな教材・指導法

４－１　教材

ひらがなを導入する際に使用している教材は、教師によって異なるが、主に使われているものは、フラッシュカード、空書、ネット上にある書き取りシート、絵カード、インド初中等日本語教育のテキスト『UME』の本冊と練習帳、マス目がある算数のノート、JICA 海外協力隊日本語教育隊員が作成したテキスト『はし』等である。

４－２　指導法

指導法も教師によって異なる。デリーおよびデリー郊外の初中等教育機関で日本語教育に携わっている 6 名のインド人日本語教師への聞き取り調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

教師 A は、ひらがな導入前にひらがなの説明（46 字あることを伝える）をし、1 レッスン「あ～お」を 5 つずつ導入する。その後、「あい」「あう」「あお」など意味のある語を導入し、フラッシュカードと 50 音表で読み方を確認し、ホワイトボードで書き順を提示する。

教師 B は、書き順と音を全体で確認した後、『UME』の「読みましょう」に書かれている語を読む。その際の注意点として、各ひらがなの読み方だけは教えるが、「読みましょう」の言葉はあえて教えず、自力で読ませる。これは、クイズみたいで面白く、生徒からも好評であるそうだ。

教師 C は、ビデオを見せて、生徒がひらがなの音だけ覚えた後、書き方や書き順をビデオで見ながら確認する。事前に生徒が宿題として作成したカードを使ってゲームを行う。

教師 D は、ヒンディー語のチャート（50 音図のようなもの）を使って、母音と子音の発音を確認する。このとき、ヒンディー語のような「男性」「女性」の区別がないので、学生は簡単だと感じる。

1 行ごとのひらがな（あ～お、か～こ等）の発音を全体で確認した後、ノートで書く練習を行う。1 行ごとに終わったら語を導入する。

５．調査概要

研究調査者 2 名（井元・羽持）は、2022 年 8 月 3 日～8 月 16 日までインド・デリー及びデリー近郊にある初中等教育機関 4 校を訪問し、教材開発のためのアンケート調査とインタビュー調査、日本文化紹介のワークショップを行った。調査実施日程は下記の通りである。

表 1 スケジュール

8 月 3 日	デリー着・調査準備
8 月 4 日	A 校にて調査・ 生徒向け日本文化紹介
8 月 5 日	B 校にて調査・ 生徒向け日本文化紹介
8 月 6 日	C 校にて調査・ 生徒向け日本文化紹介
8 月 7 日	JALSTA 会長と意見交換
8 月 8 日～11 日	教材調査・結果分析
8 月 12 日	D 校にて調査・ 生徒向け日本文化紹介
8 月 13 日	日本着

５－１－１　アンケート調査の概要

連想法を用いたひらがな導入のための絵カードにおいて、ヒンディー語のどの語を採用するかについて、デリーおよびデリー近郊の上級初等学校 6 年生を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査は英語の語がヒンディー語の語ではどのような発音になるかをアルファベットで記入してもらうという形式で行った。例えば、「い」に近い発音で始まるヒンディー語には“इमली（imli）”（タマリンドの意）があるので、タマリンドの英語“tamarind”を示し、調査対象者に“imli”と記入してもらうという形式である。

まず、ヒンディー語の辞書を用いて、「あ」から「わ」に近い音で始まるヒンディー語の語を調査した。「ん」に近い音はヒンディー語においても、語頭で用いられないため、2 番目の音がこの音になる語を選んだ。「を」はひらがなを導入する際ではなく、助詞として導入され、音声の面でも「お」と同じであることから、調査対象から除外した。

次に、辞書を用いて調査したヒンディー語の語の中から、インド人日本語教師・インド人ヒンディー語教師各 1 名とともに絵カードに適した語を選別した。こうして選別したヒンディー語の語を英語に翻訳し、アンケート調査用紙を作成した。なお、「い」はインド人日本語教師・インド人ヒンディー語教師ともにタマリンドの意味である“इमली（imli）”のみが絵カードに適しているとの意見だったので、アンケート調査用紙における例として採用し、アンケート調査の対象には含めなかった。また、「つ」に

近い音はヒンディー語では用いられないことから、調査対象から除外した。こうして、「い」「つ」「を」を除いた 43 音を対象にしたアンケート調査を行うこととした。その後、予備調査を行い、英語とヒンディー語との意味の差異を確認し、必要なものは英語の語を修正した。

５−１－２　アンケート調査の結果

アンケート調査用紙の回答は 177 名から回収することができた。全 43 問における回答数の最大は 43、最小は 5 であり、中央値は 36 であった。回答数に多少のばらつきが見られることから、四分位値を求めた結果、29-40 であった。下内境界点が 12.5 であることから、回答数が 12 問以下のものは調査対象から除外し、173 名の回答を調査対象とすることにした。

回答しているか無回答かという点と想定したヒンディー語の語の回答があったかという 2 点から分析を行った。

まず、16 の語は無回答が少なく、想定したヒンディー語の語の回答が多かったことから、絵カードに用いる語として適切であると判断し、絵カードに採用することにした。次に、無回答が少なかったものの、想定した回答が得られなかった語については、1 語を除いて想定したヒンディー語の語とその語の類義語または同義語との二分になった。これらの語は補助文を用いれば導入を行うことができると思われるので、絵カードに採用することにした。なお、想定したヒンディー語の語とその語の同義語または類義語とで回答が二分しなかった語については新たに語を選定し、再調査を行うこととした。次に、無回答が多少見られたものの、想定した回答が得られた語については、採用するものと再調査を行うものとに分けた。再調査を行うものはヒンディー語ではなく、英語の語を日常において使用することが多いため、想定したヒンディー語の語の回答が得られなかったと思われる。そこで、新たに語を選定し、再調査を行うこととした。最後に、無回答が見られ、さらに想定した回答が得られなかったものは、全て再調査を行うこととした。このうち 1 語を除き、新たに語を選定した。新たに語を選定しなかった 1 語は調査対象者がヒンディー語の語が分かるものの、その英語が分からないため、想定した回答が得られなかったと思われるので、写真を用いて再調査を行うこととした。

以上の結果から、27 音に対して用いる語を決め、16 音については再調査を行うこととした。

５−１－３　追加調査の結果

追加調査では 16 音のうち、13 音は新たに語を選定し、3 音は質問用紙の英語を変えた。また、動詞やヒンディー語は分かるが英語が分からない可能性がある語は英語に加えてそれを表す画像を用いてアンケートを行った。追加調査では現地ではなく、Google Forms を用いて調査を行った。3 校から 83 の有効回答が得られた。

図 2 アンケートに回答する生徒

回答率と想定した回答が高いものが 8 語あり、これらは絵カードに用いる語として適切であると思われるので、絵カードに採用することにした。また、回答率がやや低い語が 2 語見られたが、これらの語は補助文を用いれば導入を行うことができると思われるので、絵カードに採用することにした。最後に、類義語と二分した語についても補助文を用いれば導入することができると思われるので、絵カードに採用することにした。

本調査と再調査の結果から、「を」を除く 45 音に対して絵カードで用いる語を決定した（表 2）。

表 2 絵カードに用いる語

平仮名	ヒンディー語	意味	平仮名	ヒンディー語	意味
あ	anar	ザクロ	は	haathee	象
い	imli	タマリンド	ひ	heera	ダイアモンド
う	ullu	フクロウ	ふ	phukna	蝋燭を吹き消す
え	ek	1	へ	helicopter	ヘリコプター
お	aurat	女性	ほ	hont	唇
か	kamal	蓮	ま	ma	母
き	kitab	本	み	mitte	土
く	kulfi	インドのアイス	む	murga	ニワトリ
け	kela	バナナ	め	me	私
こ	koyal	カッコウ	も	moze	靴下
さ	samosa	サモサ	や	yatra	旅・参拝
し	shimla mirch	ピーマン	ゆ	Europe	ヨーロッパ
す	suraj	太陽	よ	yog	ヨガ
せ	seb	りんご	ら	raj kumar	王子
そ	sone jao	寝る	り	riksha	リキシャ
た	tare	星	る	rupee	ルピー
ち	chiti	蟻	れ	resham	シルク
つ	tsunami	津波	ろ	roti	ロティー
て	tel	油	わ	vada	インドのお菓子
と	tota	オウム	ん	ungli	指
な	naksha	地図			
に	neemboo	レモン			
ぬ	noodle	麺			
ね	Nepal	ネパール			
の	no	9			

本調査　追加調査　本調査＋追加調査　調査なし

5－2－1　インタビュー調査の概要

デリーおよびデリー郊外の初中等教育機関で日本語を教えているインド人日本語教師 6 名にひらがなの導入法、指導法、ひらがな指導時の困難点、教材に関して半構造化インタビューによる聞き取り調査を行った。インタビュー時に同意書を用いて研究倫理に関する説明を行い、同意サインを頂いた後、インタビューを開始した。なお、インタビュー内容は録音し、インタビュー項目ごとにまとめた。インタビュー結果は後述する。

インタビュー項目は次の 8 点である。①ひらがなを指導している対象学年と人数、②テレビ、プロジェクターなど教室にある設備の確認、③ひらがな導入時に使っている教材、④ひらがなの導入の仕方、⑤ひらがな導入で教師が工夫していること、⑥ひらがなの音と形を覚えるためにしている活動、⑦⑥を行うための教材教具、⑧ヒンディー語の音には存在しない「つ」「を」「ん」の指導法である。

5－2－2　インタビュー調査の結果

インタビュー調査で以下の 5 点が明らかになった。

①先生たちの実践共有の場がなく、自分たちの指導に不安を抱いていたり、ブラッシュアップしたりする機会がないことである。

②ディヴァナーガリー文字（ヒンディー語の文字）は書き順を大切にしていることから、ひらがなも書き順を守らせていること。書き順を守らずに書くと、字のバランスが悪くなるからである。

③バランスの良い字が書けるように、算数のノートのマスにひらがなを書く練習をさせていることである。

④ひらがなの定着には、かるたを始めとするゲームや歌を使った練習など、生徒が飽きない工夫がなされていることである。

⑤50 音図表は、導入時ではなく、復習や生徒がひらがなを忘れた時すぐに見られるように補助教材のように使っていることである。

6．ワークショップ

調査対象校となった学校の生徒と日本語教師に対して、調査協力のお礼として生徒向けの日本文化紹介のワークショップを行った。ワークショップの内容は、JALSTA からのリクエストもあり、日本の歌とダンスを行った。日本語を学び始めた生徒でも覚えやすい歌詞や日本の学校のチャイムがメロディーとして入っている MAY'S の『みんなのうた』を選んだ。研究調査者は、インド渡航前に歌詞カードや音源を準備し、事前にダンスも練習した。新型コロナウイルス流行後、どの学校でも初めて対面で行う学校でのワークショップだったため、生徒や JALSTA はもちろん、校長先生やほかの科目の先生も参加する大規模なものとなった。

ワークショップ当日は、各学校の生徒たちによるウェルカムセレモニーと校長の挨拶から始まった。その後、研究調査者（井元・羽持）と歌を歌った。歌詞の前半は前の歌詞をリピートするだけであるため、生徒たちにも難しくなかったようで、大きな声で歌っていた。そして、ある程度歌えるようになったら、ダンスを一緒にした。ダンスは研究調査者が反転した動作ができるように覚えていたため、生徒と一緒に踊った。ダンスは歌詞と連動しているため生徒も覚えやすいのか楽しそうに踊っていた。

図 3 集合写真

図 4 歌いながらダンス

何度か練習を繰り返した後、最後のまとめとして音楽を流しながら歌って踊った。研究調査者が前で踊りながら生徒たちを見ていると、とても楽しそうだった。また、生徒だけではなく JALSTA 会員であるインド人日本語教師や一緒に参加していた他の科目のインド人教師もとても楽しそうに踊っていた。

また、各学校の校長とも今後の日本語教育や情報交換などを行った。

7．本調査のまとめと今後の課題

本プログラムは初中等の学習者を対象としたヒンディー語に基づいた連想法ひらがな絵カード作成・検証・普及の第一段階とする現地でのアンケートによる語の調査と北インドの初中等教育機関におけるひらがな教材やひらがな導入

法について JALSTA 会員へのインタビューを行った。

その結果、アンケート調査からひらがな絵カードにする語を選定することができた。インタビュー調査では、具体的な教え方やひらがなの導入時に不安に思っていることなどがわかった。

これらの結果から 2023 年度では実際に絵カードを作成し、検証を進めたい。

８．本奨励プログラムからの学びや今後の課題

本奨励プログラムによって現地調査へ行くことができた。その結果、デリー近郊およびデリーの初中等教育機関を訪問し、インタビュー調査を通じて、ひらがなの導入方法やインド人日本語教師の先生方の導入方法を具体的に知ることができた。また、これまでの先行研究で明らかにされていなかった語の選定について、手順を踏んで行うことができた。これは今後、同様の教材作成を行う際の参考となり得ると思われる。

今後は絵カード作成を行うが、どのような絵が教材に適しているかという点も考えつつ、詳細に手順を踏みながら行っていきたいと思う。

参考文献

(1) カッケンブッシュ寛子・中條和光・長友和彦・多和田眞一郎（1989）「50 分ひらがな導入法－『連想法』と『色つきカード法』の比較－」『日本語教育』69 号, pp.110-125, 日本語教育学会.
(2) カッケンブッシュ寛子（2007)「連想法による韓国語話者用ひらがな学習教材開発のための基礎的研究－平成 17 年～平成 18 年度科学研究費補助金（基礎研究 B）研究成果報告書」, pp.1-165.
(3) 国際交流基金（2020a）「日本語教育国・地域別情報（2020 年度インド）」＜https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/india.html＞（2022 年 12 月 9 日）
(4) 国際交流基金（2020b）『海外の日本語教育の現状　2018 年度日本語教育機関調査より』国際交流基金.
(5) 目黒裕将・羽持悠希・井元麻美（2023）「インドの日本語学習者のためのヒンディー語に基づいた連想法によるひらがな教材の作成―語の選定のためのアンケート調査用紙の作成について―」『日本語教育方法研究会』29-2,pp.116-117.
(6) JALSTA「Hiragana and Cultural Workshop by Ms. Mami Imoto & Yuki Hamochi」＜https://www.jalsta.in/post/hiragana-and-cultural-workshop-by-ms-mami-imoto-yuki-hamochi＞（2022 年 12 月 9 日）